ソチ冬季オリンピックにおける選手育成・強化・支援等に関する検証チーム 報告書（概要）

平成26年9月

●検証チームの目的

・より効果的かつ効率的な支援を実施するために，ソチ冬季オリンピックの競技結果及び国立スポーツ科学センター，ナショナルトレーニングセンター，マルチサポート事業の効果等を分析・検証。

●ソチ冬季オリンピックの特徴

・NTC，競技別強化拠点施設におけるアスリートの育成・強化及びマルチサポート事業による支援・競技用具等の開発に4年間をかけて取り組み，臨んだ大会。
・競技用具やワックス等のマテリアルが競技結果に大きな影響（冬季競技の主な特徴）。
・冬季オリンピックとして初めて「マルチサポート・ハウス」を設置（2箇所）。
・冬季オリンピックとして初めて日本代表選手団の過半数が女子選手。

●ソチ冬季オリンピックの競技結果

	金	銀	銅	4位	5位	6位	7位	8位	合計
メダル獲得・入賞数	1	4	3	3	8	4	1	4	28 （入賞者総数：71人）
	8			20					

〇メダル獲得数，入賞者総数ともに，長野冬季オリンピックに次ぐ成績（国外開催の冬季大会では史上最高の成績）

〇スポーツ基本計画に掲げる3つの目標 → 今大会においては未達成
・過去最多を超えるメダル数の獲得 → 8個（過去最多：10個/長野冬季オリンピック）
・過去最多を超える入賞者数 → 71人（過去最多：75人/長野冬季オリンピック）
・金メダル獲得ランキング10位以上 → 17位

●過去4年間の取組とその分析

〇国立スポーツ科学センター（JISS） p.6～

【メディカルチェック】
・積極的な利用が進み，定期的なメディカルチェック受診が恒常的に実施されつつある。
・疾病等の身体的不調のみならず，トレーニング上の課題が発見できると選手から高い評価。

【医・科学サポート】
・スポーツ医・科学，情報等の各側面から競技力向上のための支援を実施。
・2010年以降の実施回数は年々増加（2010年；35回，2011年；39回，2012年；61回，2013年；70回）。
・医・科学サポートはNFの申請に基づいて行うものであるため，NFや選手のニーズは高く，評価されている。

【スポーツ医・科学研究】
・科学的な解明が求められる課題に対して研究開発を行い，研究成果はNFや研究機関等に還元。
<スノーボード・ハーフパイプにおける研究事例>
日本人選手と海外選手の滑走軌跡や滞空時間等を調査した結果，第1エアの高さに違いがあることが明らかになり，選手や指導者に対して有益な情報を提供することができた。

【スポーツ診療】
・スポーツ外傷・障害・疾病に対する治療や，リハビリテーション，心理カウンセリング，栄養指導等を実施。
・ソチ冬季オリンピック出場選手のスポーツ診療受診歴は，過去2大会と比較して大きく上昇。
（トリノ；54％，バンクーバー；72％，ソチ；96%）
※2013年には，ハイパフォーマンス・ジムと風洞実験棟が新たに設置され，効果的なトレーニングに貢献。

〇ナショナルトレーニングセンター p.16～

【ナショナルトレーニングセンター（NTC）】
・冬季競技専用トレーニング場が備わっていないため，共用コートやトレーニングルーム等を利用。
・JISSの測定と基礎トレーニングを兼ねた利用がされている。

【ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設】
・冬季競技のうち，11競技・種別について競技別強化拠点施設を指定。
・競技別強化拠点施設が指定されている競技のソチ冬季オリンピック出場選手のうち，94%が施設を利用。
・充実した設備や専門性を有するスタッフの配置，選手の優先利用について，選手からも高い評価。
・設備を十分に活用しきれていない事例や，スタッフとの連携に課題がある事例が報告されており，改善が必要。

〇マルチサポート事業 p.22～

・メダルの獲得が期待できる競技をターゲットとして，多方面から専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に実施するとともに，マルチサポート・ハウスを選手村村外に設置するもの。
・ターゲット種目は，その他の種目と比較して，メダル獲得や入賞が多い。
→ 獲得メダル8個のうち7個が，入賞28のうち22が，ターゲット競技種目

【アスリート支援】
・スポーツ医・科学，情報等の各側面から支援を実施。毎年度実施日数増加。
・技術的なサポートについて，NFのスタッフのみでもシステムを活用できるような体制整備が必要。
<スキージャンプにおける支援事例>
試技直後に動作・姿勢等を確認できる「即時フィードバックシステム」の活用により，効果的な強化活動が可能に。

【研究開発】
・競技，トレーニング，コンディショニングの3分野について，選手や指導者，NFからの要望を踏まえた開発を実施。
<スキーワックスの開発事例>
ワックスは競技パフォーマンスを左右する大きな要因であり，競技力の向上につながったと選手からも高い評価。
・用具の開発が大会に間に合わず，利用されなかった事例が報告されており，開発スケジュール等についてNFと開発スタッフとの間で密接な連携が必要。今後もNFや選手，指導者のニーズ等を踏まえていくことが重要。

【マルチサポート・ハウス】
・選手村村外におけるスポーツ医・科学，情報面等の総合的なサポートの拠点として，大会期間中に設置。
・冬季競技の特徴を踏まえ，日本国内と同様のサポート環境整備と，競技用具の整備を含めたサポートを実施。
・延べ利用者数は1,309人（コースタル・クラスター；約27人/日，マウンテン・クラスター；約33人/日）。
・コンディショニングミールの利用が最多。
・利用選手のうち，95%が「試合前の調整や試合後のリカバリーに役立った」と回答。
・競技会場等からのアクセスについて，「もう少しアクセスが良いとうれしい」という選手からの意見。

〇女性アスリートへの支援 p.35～

・「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」において，女性特有の課題に対応した支援プログラム等を実施。
<スノーボード アルペン選手へのサポート事例>
同種目においては，女性用の競技用具が市販されていないため，専門トレーナーの帯同等の支援を実施。
<子育て期のアスリートに対するサポート事例>
ベビーシッターの帯同費への支援等により，トレーニング時間の確保・トレーニングに専念できる環境の整備。

〇競技力向上施策の国際比較 p.38～

・我が国の国際競技力向上施策の参考とするため，各国の競技力向上施策についても分析。
・ロシア：政府が主導となって強化戦略を策定しており，海外コーチの招へい等，強化対象競技に対する重点的な資源配分を実施。
・オランダ：メダルポテンシャルアスリートのメダル獲得成功率が前大会から大きく増加（前大会；23.1%，今大会51.5%）。

●今後の国際競技力強化に向けて

・本検証の評価対象となった取組は，諸施策と連携することで効果的に機能。この結果，アスリートに対して良好なトレーニング環境を提供することができ，優れたパフォーマンスを発揮することに貢献。
・一部の競技別強化拠点施設やマルチサポート事業による研究開発においては，スタッフと選手や指導者等との連携がスムーズでなかったと思われる事例も見受けられたため，改善が必要。
・競技力向上施策が日々進化している現状において，各国の選手育成・強化・支援等に関する事例について研究していくことが重要。
・2018年の平昌冬季オリンピック等に向け，これらの事業について更なる質の向上を図り，継続して支援を行っていくことにより，国際競技力をより一層向上させる取組を期待。